

自然に学ぶ

校長 成田 忠雄

「春」 安西冬衛

てふてふが一匹だったん韃 韃海峡を渡って行った

これは私の好きな一行詩です。「てふてふ」とは蝶のことを言っていますが、平仮名で書き表わされると、実にふわふわした羽ばたきをイメージさせます。韃韃海峡とは、現在は間宮海峡（タタール海峡）と呼ばれ、ユーラシア大陸とサハリン島の間にある海峡のことです。

春になって、ふわふわした蝶が一匹、雄大な海峡を渡っていたという情景です。ここで、どうして海峡なのか。そしてなぜ蝶なのか。これはきっと、作者のもっている心象風景ではないかと解釈されることもありますが、実は、本当に海峡を渡る蝶がいるから驚かされます。それはアサギマダラという蝶です。

アサギマダラは、一年の内に日本本土と台湾を行き来します。海峡というと荒れ狂う海をイメージしますが、そこを渡る弱々しい蝶が、人々の営みという社会の中に投げ出された小さきものを表しているようで、この対比が実に面白いと思います。

自然というのは雄大です。そして神秘的なものです。この自然の前には、人間というのは、なんとちっぽけな存在であることでしょうか。小さな事に悩んでいることが実に馬鹿馬鹿しくなってきます。大洋を渡っていくアサギマダラのように立ち向かう勇気を持ちましょう。そして些細なことには動じない、おおらかさを持ちましょう。何かにぶつかり前に進めない時には、身近な自然からたくさん勇気をもらったらいいのです。

この春、たくさんのアサギマダラが、この広瀬川の畔から旅立ちます。